



あおおに

かい ぎょ すい ぞく かん
怪魚のねむる水族館

ノプロプス
noprops / 原作

くろ だけん じ
黒田研二 / 著

すずら き
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぞ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、青鬼と勇敢にたたかっていた。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。水族館の人気者・イルカにちょっぴり嫉妬中……？

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちは、洋館「ジェイルハウス」と、廃校「碧奥小学校」、「碧奥医院」、「ドクロ島」と呼ばれる青島でこの怪物に出遭っている。弱点は犬であること以外、どうやって生まれたのか、どこからやって来たのか、すべてがなぞに包まれていたが、「まほろば遊園地」で出遭った怪物は、もともと人間であったことが明らかになり……。

ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の關係。



ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。イケメンと、動物などのカワイイものに目がない。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。まほろば遊園地でクロさんの本性を知ってしまい……。



クロさん

ネイチャーガイド。卓郎と美香が通う東部小学校の課外授業で、ガイドをしていたことをきっかけに、ひろしたちと知り合い、一時期行動を共にするが、ドクロ島でおそろしい本性が明らかになった。



目次

- 1 怪魚、現る
- 2 水族館の人気者
- 3 危険な再会
- 4 夜の水族館
- 5 つきまとう青いほのお
- 6 奇妙な魚たち
- 7 逃げ出した怪魚
- 8 消えた大人たち
- 9 水族館から逃げ出せ!
- 10 怪魚の行方
- 11 飛びはねる悪魔

099 090 081 072 063 054 045 036 026 013 006

- 12 怪魚をつかまえる!
- 13 ユルサナイ
- 14 とびらの向こう側
- 15 ガラスごしの会話
- 16 たのみのつな
- 17 美香ちゃんの危機
- 18 怪物との再会
- 19 クロさんの真実
- 20 ひろし君に届け!
- 21 さよなら怪魚
- ひろしによるなその解説

235 208 195 184 174 165 156 146 137 122 110

あらすじ

なつやす あいだ ち え ゆう き なん ど き め
夏休みの間、知恵と勇気で何度もピンチを切り抜けてきた、
ぼく——タケル。いっしょに化け物に立ち向かったひろ
くん たけし くん たくろうくん み か
し君、たけし君、卓郎君、美香ちゃん、そしてナオちゃ
んとはすっかり「仲間」って感じた。今日はナオちゃんの
なか ま かん きょう
さそいを受けて、みんなで夕方から碧奥水族館にやっ
てきてるんだ。今夜は水族館内に用意されたテントに
ごん や すいぞくかんにん よう い
寝とまりしながら、夜の魚たちを観察する「ナイトア
ね よる さかな かんさつ
クアリウム」っていうイベントに参加する予定なんだ
さん か よてい
けど……この警報音、一体なにか起きてるの!?

へき お すいぞくかん み と ず
碧奥水族館の見取り図は 237 ページに、

バックヤードの見取り図は 238 ページにあるよ!

1 怪魚、現る

操舵輪のとなりに取りつけられた魚群探知機のモニターを見つめながら、鮫島海斗はわずかに首をひねった。

モニターには大量の魚の影が映っている。おそらくマダイの大群だろう。このあたりはタイがたくさんとれる。だからこそ、漁師である彼の父親はここへ船を向けたのだった。

だが、どうも様子がおかしい。

海斗は幼いころから、父の船に乗って漁の手伝いを続けてきた。大人になり、水族館に就職した今でも、仕事が休みのときはこうやって父に付き合っただけで漁に出る。

大学では魚について様々なことを学んできた。四十年近く漁師をやっている父にアドバイスをすることもたまにある。父は「生意気をいうな」と文句を口にしながらも、三回に一回は海斗の言葉に真剣に耳をかたむけてくれた。

船首に立ち、海中にアミを放りこむ父に目を向ける。真っ黒に日焼けしたたくましいうでも、眉間にしわを寄せながら黙々と作業する姿も、海斗がまだ子供だった十数年前とちつとも変わり

ない。

海斗はもう一度、モニターに視線を落とす。呼吸をするのも忘れて、魚の動きを観察する。やはりそうだ。マダイたちの様子がおかしい。

たいていの生物は、移動を行う際、決まったルートをたどる。敵の少ない場所、エサや水を飲むのに適している場所を経験から学び、自然と移動しやすい道すじを作っていくのだ。けもの道と呼ばれる道が山の中にできあがるのも同じ理由からだつた。

それは魚類も例外ではない。海の中に道など存在しないように思う人もいるかもしれないが、イワシ、ヒラメ、マダイ……それぞれの魚によつてふだん通るルートは決まっている。その習性を利用して、漁師たちは魚をつかまえる。魚たちがいつも通る道にあらかじめアミを張り、引っかけて動けなくなるのを待つのだ。

碧奥海岸沖一帯は我が家の庭みたいなものだつた。漁師でない海斗も、マダイの通り道はほぼ完璧に理解している。だからこそ、今日の魚たちの動きは不可解で仕方ない。

マダイたちは明らかに、いつもとちがうルートをたどっている。リーダーに映つた魚の数も、ふだんと比べて異常に多かつた。魚の大きさも小さいものから大きいものまでまちまちだ。

体長二十センチ前後の小さなマダイは普通、群れを作つて行動するが、それよりも大きな個体

は群れからはなれて単独で泳ぎ回ることが多い。大小様々な個体がいつしよに行動するのはかなりめずらしい状況だ。さらに移動するスピードも異様に速かった。

いつもと異なるルートをいつもより速いスピードで、ふだんは群れない個体もいつしよになって移動している。その理由はひとつしか考えられなかった。

マダイたちはなにかから必死で逃げていたのだ。

では、一体なにかから逃げていたのだろうか？ マダイは天敵が少ないことから海の王者と呼ばれている。稚魚ならまだしも、大人になったマダイをおそうのはせいぜいサメくらいだろう。だが、海斗の知る限り、このあたりにサメが出没したことは一度もない。レーダーをどれだけ確認しても、それらしき影は映っていなかった。

胸さわぎがする。

海斗は操舵席をはなれ、父のもとへ向かった。

海には数多くの危険が存在する。ささいな油断が命取りになることもしばしばだ。実際、父の知り合いの漁師の何人かも、漁の最中に思いがけない事故に遭って亡くなっていた。慎重すぎるくらいがちょうどいい。

「父さん」

いったん、この場をはなれよう——そう提案するつもりで、父に声をかけたそのときだ。船が大きくゆれ、海斗はバランスをくずした。足をすくわれ、船床に強くこしを打ちつける。父も危険を感じたのだろう。海中に放ったアミを急ピッチで巻き取り始めた。つい先ほどしかけたばかりだというのに、アミには何匹ものマダイが引つかかり、勢いよくはねている。再び、船がゆれた。アミを抱えていた父のからだだが海に向かつて引つ張られる。

「父さん！」

海斗は船床をけつて立ち上がると、父に飛びついた。そのままふたりに甲板にたおれこむ。父をおさえこむのがあとも少しおそかったら、ふたりとも海に落ちていたかもしれない。

アミが海へと引きもどされていく。あわててアミをつかんだが、ものすごい力で引つ張られた。どうすることもできない。

父が立ち上がり、素早くウインチのスイッチを入れる。巨大なドラムを回転させることで、自動的にアミを巻き取る装置だ。

海斗は船のへりにしがみつき、海をのぞきこんだ。海面近くに銀色の影が見える。魚だ。どうやら、アミに引つかかっているらしい。アミから逃れようとしているのか、懸命にからだをくねらせているのがわかった。その魚がアミを引つ張っていたのは明らかだ。

大きな魚だが、驚異的というほどでもない。せいぜい体長一メートルくらいだろう。だが、そのパワーは尋常ではなかった。一トン以上の魚でも楽々引き上げてしまうウインチを使っているというのに、なかなかアミを巻き取ることができない。少し引いては引つ張られ、また少し引いては引つ張られ……綱引きのような状態がしばらくの間、続いた。

一体、どんな魚なんだ？

海斗の中で、好奇心がむくむくとふくれあがる。シルエットを見れば、たいていの魚は瞬時に判別できる自信を持っていたが、しかし目の前でもがいているその個体が何者なのか、海斗にはまったくわからなかった。

ピシッピシッと氷にヒビが入るような音がひびいた。音のするほうに目をやる。長時間の綱引きにたえられなくなつたのか、アミがほつれ始めていた。放つておいたら、そのうちちぎれてしまふかもしれない。

高価なアミだ。失うわけにはいかない。とつさに、海斗はアミをつかんだ。アミにかかつたなぞの魚をこの目で見てみたいという思いもあった。

船全体がぐらりと左にかたむく。ウインチが苦しそうな悲鳴をあげた。このままだと船がひっくり返つてしまふかもしれない。

「チクシヨー！　くたばりやがれ！」

父は操舵室の入口に備えつけてあった銚を手にとると、大きくふりかぶり銀色の影に向かつて放った。

銚は見事、影に命中した。アミを引つ張る力が一気にゆるみ、ウインチが勢いよく動き出す。海斗はほつと安堵の息をもらしながら、巻き上げられるアミを見つめた。

たくさんのマダイにまじって、銀色の魚が引き上げられる。

「……なんだ、これ？」

体長一メートルほどの魚がじつとこちらをにらみつけてくる。背びれ近くに銚がつきささり、そこから青い体液がにじみ出していた。

ずいふんと弱っていたが、それでも海斗が近づくと、まるで威嚇するかのように口を開けた。

アイスピックのようにするどくがった牙が見えかくれする。大きく開いた口は、海斗のうでくらいであれば軽々と食いちぎってしまうかもしれない。

いびつにゆがんだグロテスクな頭、まったく感情を読み取ることのできない冷たい目、あたり 때마다よう悪臭——まるで怪物だ。

マダイがいつもとちがうルートを尋常ではないスピードで移動していた理由を、海斗はようや



く理解した。

マダイたちはこの怪物から必死で逃げたのだろう。

ぐぎゃあ！

怪物が奇妙な鳴き声をあげる。感情のこもらない目玉が海斗のほうを向いた。思わず背すじがこおる。

——おまえを食ってやる。

そんな声がどこからか聞こえたような気がした。

2 水族館の人気者

となりの人が座席に置いたスマートフォンから、夕方のテレビニュースが流れてくる。

目の前でくり広げられるショーに夢中になり、アプリを終了させるのを忘れてしまったらしい。迷惑な話だ。もっとも歓声にかき消されてしまい、ぼく以外はだれもテレビの音声も聞いていることになって気づいていなかったのだけれど。

だれの役にも立っていないスマートフォンがだんだんかわいそうに思えてきて、ぼくはニュースに耳をかたむけた。

あまいマスクと辛口なコメントのギャップが若い人を中心にウケているタレントの大地ヒカルがなにやら騒動を起こしたらしい。ペットとして飼っていたワニを海岸に遺棄した疑いで警察につかまったのだとか。

大地ヒカルはアフリカ生まれの動物をたくさん飼っていることで有名だ。ほかにも様々な動物を捨てた疑いがあり、警察は捜査を続けているという。

ペットとして飼っていた動物を、あきたからと捨ててしまうなんてとんでもない男だ。ぼくは

激しいかりを覚えた。もし目の前に大地ヒカルが現れたら、思いきりかみついてやってもいい。

そういえばお父さんも、テレビに映った大地ヒカルを見て、「こいつはうさんくさいからきらいだ」といつていた。大地ヒカルがいつも首に巻いているトレードマークの赤いパンダナさえも気に入らないらしい。お父さんの見る目はまちがっていなかった。大地ヒカルはサイテーな人間だ。

よりいつそう大きな歓声が周囲にひびきわたる。ぼくは巨大な円形プールに目をやった。

二頭のバンドウイルカが勢いよく宙に飛び上がる。夕焼け空にまい散った水しぶきは、イチゴ味のかき氷にかけられたコンデンスミルクとよく似ていた。

口の中にイチゴミルクのあまい味が広がり、よだれがこぼれ落ちそうになる。ぼくもイルカみために空高くジャンプして、かき氷にむしゃぶりつきたくなった。

でも、残念ながらそれは不可能だ。ぼくはせまいケージの中におしこめられている。この場所は決してきらいじゃないけれど、今は外に飛び出して、イルカみたいにぴよんぴよんとはねたい気分だ。

場内に流れる軽快な音楽に合わせて、二頭のイルカはジャンプをくり返した。そのたびに拍手

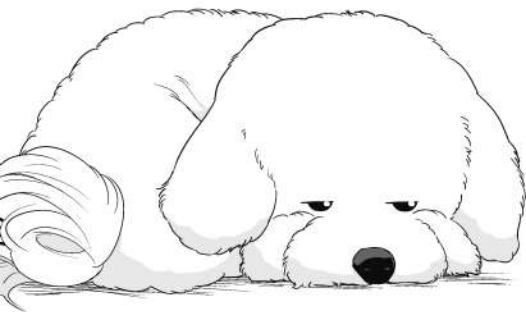
がわき起こる。

背中せなかに白い斑点はんてんのあるイルカ——ジュンが、ぼくたちの目の前まえを通過つうかした。そのすぐ後うしろを口先くちばしの長いイルカ——メイが追いかけていく。二頭にとうは夫婦ふうふで、ジュンが旦那だんなさん、メイがおよめさんだ、とショーの冒頭ぼうとうで飼育員けいよくいんのお姉さんねえが解説かいせつしてくれた。どちらも五歳ごさい。メイはジュンに比べてやや小柄こがらだが、ジュンより一カ月いっかげつだけお姉ねえさんなのだとか。

空中くうちゆうで器用きようにからだをひねって一回転いっかいてんしたり、水族館すいぞくかんのスタッフスタッフが手に持もつたりリングをいとも簡単かんたんにくぐり抜ぬけたり、ジュンとメイ——二頭にとうのイルカのショーはますます盛り上あがりを見みせていた。

「すごい！　すごいね！」

興奮こうふんした様子ようすでそう口くちにしたのはナオちゃんだ。目めをキラキラとかがやかせながらイルカたちのほうを見みつめ、手てのひらがはれあがるんじ



やないかと心配になるくらい大きな拍手を続けている。

「ふたりとも息がぴったり！」

ふたりじゃないよ、二頭だから。

ナオちゃんのほうをにらみつけ、ぼくは口をとがらせた。そんなぼくの思いを読み取ったかのように、

「スタッフさんの命令も全部わかってるみたいだし、なんだか人間っぽいよね」

ナオちゃんは早口でいった。

「イルカつてすぐ頭がいいんだね」

「イルカは体重に占める脳の割合が、人間の次に大きいですから」

そう答えたのはナオちゃんのとなりに座っていたひろし君だ。イルカの泳ぐプールに視線を向けたまま、淡々と説明を続ける。

「脳が大きいほど頭がよいと一概に決めつけることはできませんが、イルカの頭のよさは様々な研究で証明されています。鏡像自己認知テストもそのひとつだといってよいでしょう」

「きょうどう……え？ なに？」

当然ながら、ナオちゃんとはまどいの表情を見せた。

「鏡像自己認知テスト。鏡をのぞきこんで、そこに映った顔が黒くよごれていたら、桜田さんはどうしますか？」

「え……もちろん、すぐに顔を洗うけど」



「なぜですか？」

「なぜって……だって、よごれてたらはずかしいもん」

「それは、鏡に映っているものが自分だと理解しているからですよね？」

「……うん、そうだけど」

なにを当たり前前のことをいつてるんだ、といわんばかりの表情で、ナオちゃんは答えた。

「たいていの動物は鏡に映った自分を見ても、それを自分自身だと理解することはできません。

しかし、人やイルカはちがいます。自分は自分だとわかる生き物——」

ひろし君の言葉をかき消すように、大きなドラムロールが鳴りひびいた。

「メイちゃん、がんばれーっ！」

ひろし君の前に座っていたたけし君が、大声をあげながら、立ち上がってこぶしをぶんぶんと

ふり回す。

上空からロープにつながれたボールがゆつくりと下りてきた。その高さはひろし君の身長しんちゆうの五

倍ばいくらいある。水中から飛び上がったメイが、口先でボールにタッチした。ボールが左右さゆうに大き

くゆれる。歓声かんせいとともに、ひととき大きな拍手がひびきわたった。

「うっひゃあ！　メイちゃん、サイコーッ！」

たけし君は飛び上がって喜んでゐる。

「すごいすごい！」

ナオちゃんも目をかがやかせていた。

……なんだか面白くない。

ぼくはあくびをひとつして、その場に寝そべった。

ぼくだって高く飛び上がったり、リングをくぐったり、それくらいは楽勝だ。鏡に映った姿が自分だってこともわかるし、みんなの言葉も充分すぎるほど理解している。ぶら下がったボールをつつくなんて目をつぶっていたってできるし、それどころか、投げたボールを空中でキャッチすることだって朝飯前だ。もちろん、水上じゃなくて陸上での話だけれど。

イルカみたいにヌルヌルじゃなく、抱きしめれば陽に干した毛布みたいにモフモフしているし、目だってイルカよりくりくりと大きくてかわいい。それなのにどうして、イルカばかりがこんなにもてはやされるのだろうか？

夏の暑さもようやく一段落し、屋外に出ても長い舌をだらしなく垂らしてハアハアとあえぐ必要がなくなつた九月半ばの休日。

ぼくたちは海岸沿いにある碧奥水族館へとやってきていた。

水族館に到着したのは太陽が大きく西にかたむいた夕方六時過ぎ。ゆっくり館内を見学するひまもなく、今日最後のイルカショーが始まった。

イルカショーの終了は午後七時。その一時間後に水族館は閉館してしまう。それじゃあ、全然楽しめないじゃん。もしかしてたけし君あたりが遅刻でもしてきたの？ とみんなは思うかもしれないが心配ご無用。すべて予定どおり。ぼくたちの水族館めぐりは、閉館後からが本番だった。

夜の水族館を楽しむことのできる〈ナイトアクアリウム〉は、碧奥水族館が地元の小学生たちのために企画した特別イベントだ。水族館の館内にテントを張って宿泊し、ふだんは見られない真夜中の魚の生態を観察できるということで、子供たちに大人気らしい。しかし、抽選で選ばれる幸運な子供は毎週一名だけ。イベントが始まった当初から、ひろし君はせつせと応募ハガキを書いて投函していたというが、いまだ当たつたためしはないそうだ。

子供たちの間では当選率一千倍とも二千倍ともうわさされている〈ナイトアクアリウム〉に、ついにナオちゃんが当選した。当選者は友達を五名まで連れていくことができるのだとか。ナオちゃんにさそわれたとき、ひろし君は「もちろん行きます。行かせてください」と即答したそうだ。いつもクールなひろし君が、このときばかりはナオちゃんにぐいぐいつめ寄つたというのだ。

から、彼にとつてへナイトアクアリウム」がどれほど魅力的だったのかわかる。

ナオちゃんひろし君のほか、卓郎君、美香ちゃん、たけし君——いつものメンバーをへナイトアクアリウム」に招待した。まほろば遊園地で助けてもらったお礼らしい。ジェットコースターの上で、あわや怪物に食べられそうになったときのことをいつているのだろう。だったら、タケルにもお礼をしなくちやということになり、最後の一名にはぼくが選ばれた。水族館に確認をとつたところ、移動用のケージに入れていただけならということ、こうしてぼくもみんなといつしよに人生初の……じゃない、犬生初の水族館へやつてくることのできたというわけだ。

イルカの人気ぶりに嫉妬したぼくがケージの中で寝そべってふてくされている間も、ショーは進行していった。

「あ、見て見て。卓郎君だよ」

ナオちゃんの言葉に、耳をぴくりと動かす。顔を上げ、みんなの視線の先に目をやると、プールのほしに卓郎君が立っていた。がらにもなく緊張しているのか、どこか表情がぎこちない。

「卓郎、がんばって！」

美香ちゃんの声が聞こえた。最前列の席に陣取って、身を乗り出しながら卓郎君に声援を送つ

ている。

イルカショーが始まった直後、「マーチ君とふれ合いたいお友達は手をあげて！」と進行役のお姉さんが客席に向かって話しかけ、手をあげていないのに、「じゃあ、そのカッコイイ男子！」と卓郎君が選ばれてしまった。その横でたけし君が「はいはいはいはい、オレオレオレオレ！」とさげびながら派手なジェスチャーを見せていたにもかかわらずだ。なぜ、卓郎君が選ばれたのか、ぼくにはよくわからない。「イケメンっていうだけでひきようだぞ！」とたけし君はおこつていたけれど。

係員に連れられて卓郎君はどこかへ行つてしまい、これが約十分ぶりの再会となつた。

美香ちゃんの席のすぐとなりはスタッフ専用のエリアとなつていて、放送用のマイクやショーで使う機械を操作するための様々なスイッチが並んでいる。

「みなさん、お待たせしました！」

マイクをにぎつた進行役のお姉さんが元氣よくさげんだ。

「それではジュン君とメイちゃんの子供——マーチ君の登場です！」

卓郎君のとなりに立つていた長身のスタッフが笛をふくと、水上に三匹目のイルカが現れた。メイよりもさらにはからだが小さく、顔つきもどこか幼い。

「マーチ君は先日二歳になったばかり。ショーに出るのは今日が初めてです。緊張しているで、もしかしたら失敗してしまうこともあるかもしれませんが、みなさん、温かく見守つてあげてください」

プールわきの巨大スクリーンに、ジュンとメイの姿が映し出された。二頭は卓郎たちがいる場所から少しはなれた水中で静止し、じつとマーチのことを見つめている。

子供イルカのマーチは卓郎君のそばまで泳いでくると、水上に顔だけを出し、キイとかん高い声で鳴いた。

「では、マーチ。お友達と握手をしてみましよう」

スタッフが卓郎君のかたをたたく。事前に打ち合わせをしていたのだろう。卓郎君はぴんとおぼした右うでを胸の前まで持ち上げた。それが合図だったのか、子供イルカが勢いよく飛び上がり、胸びれで卓郎君の右手にタッチした。

「お見事！」

進行役のお姉さんが大声でさけぶ。同時にものすごい拍手と歓声がわき起こった。大スターが目の前に現れたかのような盛り上がりだ。主役のマーチは早々に水中へともぐつてしまったから、まるで卓郎君ひとりだけが喝采を受けているみたいだ。卓郎君は顔を赤くし、照れくさそうに頭

をかいた。

水中から顔を出したマーチは優雅な泳ぎを披露すると、プールからはい上がって卓郎君の足もとに近づいた。卓郎君を見上げ、胸びれで床を数回たたく。もつとこつちへ来い、と卓郎君に話しかけているみたいだ。

「あれ？ マーチ君、どうしたんでしょう？ 卓郎君、マーチ君のお話を聞いてくれますか？」

お姉さんの言葉に従い、卓郎君はこしをかがめてマーチに顔を寄せた。

キイツ

マーチはかわいらしい鳴き声をあげると、卓郎君のほおにキスをして、再び水中へと姿を消した。



卓郎君はほおをおさえたまま、きよとんとした表情でその場にたたずんでいる。

観客席のあちこちから笑い声がもれ、会場全体が温かい空気に包まれながら、イルカショーは終了した。

『次のニュースです。今日の午後三時ごろ、碧奥水族館近くの海岸で青いひとだまのようなものを見かけたとの通報が数件あり——』

となりの人は、ようやく自分のスマートフォンからテレビの音声もれていることに気づいたらしく、そこでアナウンサーの声はぶつりととぎれた。